

伝統と多彩で新たな挑戦

54 回講師 洲浜 昌三

大会の一週間くらい前、電話がありました。「緊急で申し訳ないのですが…」。予定していた講師にやむを得ない事情が生じたらしいです。高校生の演劇を観るのは楽しみです、退職後も、ほぼ毎年島根県大会も講師で観劇していましたし、大田市演劇サークル劇研「空」で脚本を書いて上演していましたので、気持は第一線の現役です。そして広島新庄との県境・田所で生まれたぼくには広島には親近感があります。同じ方言、飾りのない率直な気質、更に山の上空に広がった原爆雲が幼い目に深く刻印されたことも、親しみと共生感につながっているかもしれません。というわけで、ピンチ・ヒッターならぬピンチ講師として福山へ行きました。福山は初めての町です。見事な福山城が駅の前に見えて驚きました。

会場の福山リーデンローズは約 2 千人収容できる大きなホールでした。会話の言葉が分かりにくいことが度々あったので、ある先生に、「ぼくの耳が悪いんですかね」と尋ねると、「残響時間が 2 秒あるそうです」とのこと。残響音が長い方が音楽の発表には好まれるようですが、演劇の場合は別です。ちなみに大田市民会館は舞台幕設置時は 1.8、反射板設置時は 2.3 秒。このホールで今まで残響音を気にしたことは一度もありませんでした。

この大会も広島大会の伝統を引き継いで、多彩な創作劇が上演されました。生徒や部の創作 4 本の中でも観音・森井あや香さんの「ミサンガ」は新鮮な視点から描いた力作で、工夫された舞台装置を生かし笑いと共に感動も残る舞台でした。尾道北は演劇部作でしたが、観客の視点も忘れず描かれたいい作品でした。福山・中高・林名央さんは中学生でしたが、高校生の創作に見劣りしませんでした。清水ヶ丘・岡田隆一先生の創作は一般客を対象にしたようなテーマで、変わっていく時代の中で父母が残してくれたものを引き継いでいく苦悩と決意を温かい目で描きキャストも好演。基町・松本誠司先生の「うつつうらしまー浦島子ー高橋虫麻呂異聞一」には劇の冒頭から引き付けられ狂言でも見るような独特で文学性の高い象徴的表現が強く印象に残っています。福山・中高・新宮正一先生の「ぼくのぼあちゃん」は現代の高齢者と家族の問題を真正面から見つめ、丁寧にリアルに舞台化された作品で、手抜きのない誠実な舞台は心に残りました。

舟入・須崎幸彦先生構成、脚色「広島戦災孤児養成所『童心寺物語』」は、原爆投下後にたくましく生きる原爆孤児たちを描いたものですが、事実や史実に基づいた確かさや少年たちの広島弁も生き生きして、緻密でリアリティと迫力がある濃密感のある劇でした。沼田・黒瀬貴之先生の「はないちもんめ」を観た瞬間、黒瀬先生の新たな挑戦だ！と直感しました。広い舞台に 30 人近い部員全員がジャージで隊列を組み「はないちもんめ」を合唱。綺麗な声、見事なハーモニー！最後まで装置なし衣装は同じ。しかし骨組みのストーリーはしっかり内臓され、コロスと多彩な舞台を構成しながら、展開されていくのです。尾道北の劇も最後まで楽しく観ましたが、装置はなく、会話と演技で客席と一体感をつくりだしました。

高校演劇も、身体表現、ミュージカルの表現などを重視する傾向が強い時代の流れの中で、それぞれ置かれた場で、新たな表現を求め、挑戦されるのはとても嬉しいことです。守る意識ではなく、新たにチャレンジしていく過程で、伝統は強化され積み重なっていく。これを書きながら、広島の高校演劇について、そんなことを、ふと考えました。